

2級 【シーチング組み立て】傾向と対策

<地直し・布目>

- ・持参したシーチングが厚すぎたり薄すぎたり、糊のききすぎたもの・腰のなさすぎるものなど、ジャケットのシーチング組み立てに適さないものを使用したため、シーチングの仕上がりがうまくいかず減点されることが多いので、標準的なシーチングを購入し使用することが望ましい。
- ・シーチングの地直しは最低縦方向、横方向の2本の基準となる線がないと正確におこなうことが難しいと思われる。地の目通りに線を入れ、縦横が直角になるようにアイロンをかける。シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出ないこともあるので、試験以前の課題として適切なシーチングを正確に地直ししてしわの出ないように持参するよう心掛けていただきたい。

<身頃>

- ・今回のデザインは3面構成のパネルライン、ウエストダーツ有ということで、バストダーツはウエストダーツにてマニピュレーション処理、後ろ肩ダーツはイセて処理するのが正解となるが、原型操作の段階でダーツ量の分散が正しく行われていないとウエストダーツの分量やイセ分量が多く残り、きれいにシルエットが表せない。
- ・マニピュレーションの組み立て方はウエストダーツをピン打ちしポケット口が上下突合せになったら裏面から接着芯や接着テープで貼り合わせる。それから前パネルラインを伏せ、ポケットを付ける。そうしないとポケット口が空いてしまいシルエットが崩れる原因になる。
- ・シーチングの縫い代を片倒しの状態にピン打ちする場合、どちら側を上に乗せるかについても正解があるわけではなく、結果としてシーチングが美しく表現されていればよい。一般的には片返し処理をして縫製するときと同じ方向に倒す。
- ・ジャケットに限らずだが前端や裾、袖口は出来上がりに折り、縫い代が出てこないようある程度ピンで止める。折られていなければ未完成として不合格になるので注意する。
- ・組み立てたジャケットをボディに着せ付けする場合、前中心・後ろ中心を合わせ、シーチングが着崩れないように、必要な個所にピン打ちをする。ボディの肩にかけているだけのシーチングは完成していないとみなされる場合があるので注意する。
- ・後ろ中心の始末は模範解答のように左身頃の出来上がり線も写し伏せて縫い目として表現することが望ましい。

<ボタン（身頃）>

- ・今回、ダブルブレストのため、中心を挟んで左右にボタンが付く。まれに片方に偏って付いているものもあった。
- ・配点の対象ではないが、ボタンホールも記入し実物縫製した時の雰囲気表現できるようにしていただきたい。

<ポケット>

- ・今回はフラップ付き両玉縁ポケットになる。組み立ての場合、表面から見える上玉縁のみつければよい。
- ・フラップの外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、フラップの形状を安定させるためにも縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで身頃に付ける。カーブの場合縫い代にぐし縫いを入れるなど、きれいなカーブになるよう工夫が必要である。
- ・身頃にもポケットつけ位置を正確に写し、設定通りの位置にポケットが付くようにする。

<衿・衿付け>

- ・衿の地の目はたて地、バイヤス地どちらでもよいとされているが、地直しをしっかりとし、ゆがみがないうよう組み立てていただきたい。
- ・衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、特別な場合（微妙なカーブ線や形状の場合）以外は裁ち切りにしないで、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで、ピン打ちはしないほうが望ましい。衿付け線のピン打ちは、縫い代を折って縫い目線の際を衿付け線に沿って平行に止めるべきである。

<袖・袖付け>

- ・袖を組み立てる段階で、肘のくせを表現するためにはくせ取りが必要である。くせ取りがされておらず袖の形状が悪いものが多くあった。
- ・袖口の明きみせの始末も不備（明かないもの、エッジ始末の不良）があるものがある。事前に確認して試験に臨んでいただきたい。
- ・肩パットが縫い代端まで届いていないもの、前後片方に偏って付いているものは安定した状態で袖付けがされず、見栄えが悪いものが見られた。肩パットはアームホールの縫い代に端から端までがしっかりと掛かるように設定し、はみ出した余分な部分はカットする必要がある。
- ・袖付けのピン打ちは、縫い目線の際を袖付け線に沿って平行に止めるが、ピン打ちの不備のために袖のシルエットを崩してしまったものが多かった。ピン打ちでイセの表現ができない場合、ぐし縫いをするなど袖山の形状をある程度セットしてから付けるなど工夫が必要ではないかと思われる。
- ・袖を素早く、安定して付けるにはパターン上でイセの配分をし、合い印を入れておく。それを身頃・袖のトワルに確実に写し組立てる必要がある。
- ・袖は体型上振りが必要である。作図の段階で振りが表現されているのはもちろんだが、袖を付ける段階でも袖が振れているよう付けなければならない。事前に練習が必要である。